

(11月29日)「コリントの信徒への手紙二 12:1~5」

わたしはそのような人を知っています。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。  
(コリントの信徒への手紙二 12章3節)

- ・パウロがここで語る「キリストに結ばれていた一人の人」というのは、パウロ自身のことのようにです。また「第三の天」というのは天をいくつかの等級に分けるユダヤの考え方に基づくと「樂園」を指していたようです。
- ・パウロは神さまの恵みによって、自分は樂園にまで引き上げられたのだと語ります。ただパウロがこのことを客観的に語っているように、パウロはこの体験のことを具体的に伝えたいわけではなさそうです。
- ・パウロは樂園に引き上げられた自分を誇り、そして自分自身の「弱さ」をも誇ります。一見すると矛盾したことのようにも思えます。しかし後述していくように、いずれも「神さまの力」が強調される出来事です。パウロはそのことを伝えていくのです。

(11月30日)「コリントの信徒への手紙二 12:6~10」

すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。

(コリントの信徒への手紙二 12章9節)

- ・わたしたちは、強くありたいと願います。肉体的にも霊的にも、強く雄々しくありたいと思うのです。パウロもそうだったのでしょう。パウロには「とげ」が与えられていました。
- ・パウロはそれを除いてほしいと、三度も神さまに願ったそうです。しかしそれは、取り除かれませんでした。パウロの「とげ」とは何でしょうか。一説には肉体的な病気だと解釈されています。そのとげが、宣教活動に支障をきたしていたようです。
- ・しかし反面、そのとげに対処することによって与えられた恵みにも気づかされていきます。人々の手助けだけでなく神さまの導きなど、「弱い」からこそ「喜ぶ」ことができるのです。そしてパウロは力強く語るのです。「わたしは弱いときにこそ、強い」と。 16

## コリントの信徒への手紙二 通 読

11月



(11月 1日)「コリントの信徒への手紙二 4:1~6」

わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています。わたしたち自身は、イエスのためにあなたがたに仕える僕なのです。  
(コリントの信徒への手紙二 4章 5節)

- ・自分は使徒であることを強調するパウロですが、それは決して自分を大きく見せようとするためにしていることではありません。「自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています」と書いてある通りです。
- ・わたしたちには「キリストの福音」を伝えているつもりが、「自分」を語ってしまうことはないでしょうか。キリスト教の教派によっては、「証し」という自分自身の体験を語る時間を大切にしているところがあります。
- ・しかしそれが、単なる「自分語り」になってしまったら、元も子もなくなるのです。わたしたちは神さまの栄光を賛美し、イエス様を通して示された神さまの愛を伝えていくことを求められているのです。

(11月 2日)「コリントの信徒への手紙二 4:7~15」

わたしたちは、いつもイエスの死を体にまっています、イエスの命がこの体に現れるために。

(コリントの信徒への手紙二 4章 10節)

- ・今日の箇所の最初にパウロは、「わたしたちは、このような宝を土の器に納めています」と書きます。ここでいう宝とは、いったい何のことでしょうか。黄金や財宝でしょうか。それとも名誉や地位でしょうか。
- ・パウロがいう宝とは、「福音(神さまからいただいたグッドニュース)」や神さまから与えられた「光」ではないかと思えます。それらは神さまの憐れみの中で与えられました。ここでいう憐れみとは、「本来それを受ける権利のない者にも与えられるもの」です。
- ・その宝があるからこそ、わたしたちはイエス様と共に死に、そしてイエス様と共に復活の命にあずかることができるのです。その宝の本当の価値を知っているからこそ、わたしたちは歩むことができるのです。

(11月 27日)「コリントの信徒への手紙二 11:21~29」

だれかが弱っているなら、わたしは弱らないでいられるでしょうか。だれかがつまづくなら、わたしが心を燃やさないでいられるでしょうか。  
(コリントの信徒への手紙二 11章 29節)

- ・パウロはキリストに仕える者となりました。しかしそのことによって苦勞し、投獄され、鞭で打たれ、石を投げつけられ、難船したことさえありました。それ以上に細かく列記されています。
- ・わたしも牧師として、様々な苦難や痛みに遭ってきました。いつ何時、何が起こるか分からないという不安もいつも付きまといまいます。そしてこれかもきっと、同じようなことが起こることでしょう。
- ・しかし一方で、苦しみ以上の喜びがあります。神さまの驚くべきみ業を間近で感じる幸せがあります。パウロもきっと、様々な教会の人たちと喜びも悲しみも痛みも、すべてのものを分かち合う幸せを感じていたことでしょう。

(11月 28日)「コリントの信徒への手紙二 11:30~33」

誇る必要があるなら、わたしの弱さにかかわる事柄を誇りましょう。

(コリントの信徒への手紙二 11章 30節)

- ・「弱さを誇る」というパウロの言葉は、次の12章にも続いていきます。それでは、「パウロの弱さ」とは具体的にどういうことでしょうか。手紙を読む限り、パウロはとても強く思えてしまっていますが。
- ・パウロは一つの出来事を取り上げます。それは、ダマスコで起こったことです。このダマスコという地は、パウロが回心した場所でもありました。パウロはこのダマスコの地に、キリスト者を捕らえて殺すのだと意気揚々と入ってきました。
- ・しかし復活のイエス様に呼ばれ、目からウロコのようなものが落ちたパウロは、逃げるようにしてダマスコを出て行くこととなります。「強さ」を前面に出しながら町に入ったパウロが、籠を使って隠れながら出て行く、「弱い」者として町を出たのです。

(11月 25日)「コリントの信徒への手紙二 11 : 12~15」

こういう者たちは偽使徒、ずる賢い働き手であって、キリストの使徒を装っているのです。

(コリントの信徒への手紙二 11 章 13 節)

・何やら恐ろしい文章が続きます。「偽使徒」、「ずる賢い働き手」、「キリストの使徒を装っている」、これらの言葉は、報酬を得ながらコリントの人たちに、「パウロが語るのとは違う福音」を伝えている人たちに語られているようです。

・こういう記述を見ると、「毒麦は育つままにしておきなさい。収穫のときに神さまが抜くから」と言われたイエス様の言葉との違いに気づかされます。パウロはどうしても人を裁く傾向があるように思えてしまいます。

・この記述を元にして、わたしたちは裁き合いをしてはいけません。一方から見たら「偽教師」に見えても、神さまから見たらそうではないということもあります。「自分こそが正義」となるとはいけません。

(11月 26日)「コリントの信徒への手紙二 11 : 16~20」

わたしがこれから話すことは、主の御心に従ってではなく、愚か者のように誇れると確信して話すのです。

(コリントの信徒への手紙二 11 章 17 節)

・パウロは使徒として活動していく中で、何度も自分の過去のことを語る必要に迫られたと思います。パウロ(当時はサウロと呼ばれていた)が回心した物語は、使徒言行録の 9 章に書かれています。

・パウロはユダヤ人ファリサイ派として、キリスト教徒を迫害していました。イエス様に従っていたステファノが殺害される場面でも、パウロはそれに賛成し、石を投げる人たちの上着の番をしていました。

・その行動はまさに、「愚か者」でした。しかしそこまで愚かな自分が変えられたということ、その愚かさをパウロは誇るのです。自分の汚い部分を隠すのではなく正面から語る、それがパウロに課せられた使命だったのでしょう。

(11月 3日)「コリントの信徒への手紙二 4 : 16~18」

わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

(コリントの信徒への手紙二 4 章 18 節)

・わたしたちは日々の生活の中で、落胆することがあります。自分に与えられたものの小ささや肉体の衰えに気がつくとき、また自分の力だけでは歩んでいくことが難しいと感じるときに、わたしたちは落胆します。

・しかし見えるものではなく、見えないものに目を注ぐようとパウロは語ります。目に見えないものとは一体何でしょう。それは神さまの愛です。神さまがわたしたち一人一人を愛し続けるという希望です。

・目に見えない空気がなければわたしたちは生きられないように、わたしたちの心の養いのためには神さまが必要なのです。目には見えないからこそ、永遠に存続する神さまの愛に信頼し、歩んでまいりましょう。

(11月 4日)「コリントの信徒への手紙二 5 : 1~5」

わたしたちは、天から与えられる住みかを上に着たいと切に願って、この地上の幕屋にあって苦しみもだえています。

(コリントの信徒への手紙二 5 章 2 節)

・4章の後半から続くこの箇所は、日本聖公会の通夜の祈りの式文に用いられることがあります。「地上の住みかである幕屋」をわたしたちの肉体に見立て、それが滅びたとしても神さまによる建物が備えられているという言葉に希望を見出すのです。

・わたしたちの幕屋には、さまざまな重荷があります。悩みや悲しみ、苦しみや痛みなど、この世で生きていく中でいつも、わたしたちは病気など、たくさんの重荷を抱えながら歩いていくのです。

・その重荷を共に担う方が、いつもそばにおられます。そして重荷を下ろした後も、わたしたちの前には「天にある永遠の住みか」があります。そこに住むことができるのは、わたしたちの力によるものではありません。神さまがわたしたちを、ふさわしくしてくださるのです。

(11月 5日)「コリントの信徒への手紙二 5:6~10」

だから、体を住みかとしていても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい。

(コリントの信徒への手紙二 5章 9節)

- ・この世界で生きていの中で、わたしたちは心の平安を求めます。苦難の中にあるときに、神さまがいつも支えてくださることを望みます。「目に見えないもの」に目を注ぐとき、わたしたちの心は強くされます。
- ・そしてわたしたちの肉体が死を迎え、わたしたちが神さまの元に行くことになっても、わたしたちには「主のもとに住む」という希望が与えられています。その希望を持ち続けることを、「信仰」と呼ぶのです。
- ・イエス様はヨハネ福音書の中で、「わたしは場所を用意しに行く」と約束されました。わたしたちはこの地上においても、そして天の御国に行っても、憩う場所が与えられていることを覚えていきたいと思えます。

(11月 6日)「コリントの信徒への手紙二 5:11~15」

その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです。

(コリントの信徒への手紙二 5章 15節)

- ・「和解」という言葉があります。「当事者が互いに譲歩をしてその間に存する争いをやめること」という意味だそうです。キリスト教では、神さまと人間の間における「和解」ということが語られます。
- ・神さまは人間の罪を、イエス様の十字架の贖いによって赦されました。そこに和解が生まれたのですが、人間側からの譲歩はまったくありません。神さまが一方向的に譲歩し、和解してくださったのです。
- ・そしてわたしたちは、多くの人たちもまたすでに、神さまと和解していることを伝えていきたいと思えます。「イエス様の十字架はあなたのためにおこなわれたことなのです」と伝えることが大事なのです。

(11月 23日)「コリントの信徒への手紙二 11:1~6」

たとえ、話し振りは素人でも、知識はそうではない。そして、わたしたちはあらゆる点あらゆる面で、このことをあなたがたに示してきました。

(コリントの信徒への手紙二 11章 6節)

- ・パウロはここでコリントの人たちを、キリストにささげられた純潔な処女として書き記します。しかし旧約聖書のエバが蛇に誘惑されたように、その純潔が守られるのかが心配だということです。
- ・コリントの教会には、様々な人たちが訪れました。その中には、「パウロはちゃんとした使徒ではない」といったパウロの悪口を言う人たちもいたようです。さらにその教えを批判したりもしていました。
- ・パウロは自分には知識があるということをひけらかしているようにも見えますが、決してそうではありません。パウロは働きだけではなく、知識においても「大使徒」に劣る者ではないということです。この「大使徒」とは一体誰のことを指しているのでしょうか。

(11月 24日)「コリントの信徒への手紙二 11:7~11」

わたしは、他の諸教会からかすめ取るようにしてまでも、あなたがたに奉仕するための生活費を手に入れました。

(コリントの信徒への手紙二 11章 8節)

- ・パウロはコリントの信徒への手紙一 9章 14節で「同じように、主は、福音を宣べ伝える人たちには福音によって生活の資を得るようにと、指示されました」と書いている通り、福音を宣教する人には報酬を得る権利があると書いています。
- ・しかしパウロ本人は、報酬を受け取ろうとはしませんでした。そのためこの行動が、コリントの人たちに誤解を与えたようです。パウロはコリントの人たちを愛していないから報酬をもらわないんだとか、人々を信頼していないんだとか。
- ・「信徒に負担を掛けたくないから」というパウロの思いと、「これは神さまのご計画のために用いて欲しい」というコリントの人たちの思いがすれ違ってしまっているのかもしれませんが、教会の献金も、「神さまのため」という目的を外れたら、同じことになるのでしょう。

(11月 21日)「コリントの信徒への手紙二 10:7~11」

わたしのことを、「手紙は重々しく力強いが、実際に会ってみると弱々しい人で、話もつまらない」と言う者たちがいるからです。

(コリントの信徒への手紙二 10章 10節)

・イエス様が厳しい勧告の言葉を言われている場面の説教をするときに、とても悩むことがあります。それは、その言葉を受け取る人が傷ついてしまわないか、とても不安になるからです。聖書をそのまま伝えるのが怖くなるのです。

・パウロはコリントの人たちに対して、ときに厳しく書き記します。自分の権威を用いたり、罰について語ったり、あらゆる手段を用います。しかしそのように書くのは、コリントの人たちが憎いのではなく、彼らを愛しているからなのです。

・たとえ嫌われたとしても、福音を正確に伝えたい。この姿勢は説教者のみならず、わたしたち一人一人が大切にしなければならないものかもしれません。とても難しいことではありますが。

(11月 22日)「コリントの信徒への手紙二 10:12~18」

「誇る者は主を誇れ。」

(コリントの信徒への手紙二 10章 17節)

・教会用語で、「神さまに栄光を帰(き)す」という言葉があります。たとえば大きなイベントが成功したとします。たくさんの力を大勢の人が出し合い、そのおかげでみんなが笑顔になったとしても、「栄光を主に帰しましょう！」と呼びかけるのです。

・時々わたしも何かをやったあとに「先生すごいですね」と言われたとしても、「いや、すごいのは神さまです」とお話しすることがあります。「またまた、謙遜して～」と思われるかもしれませんが、そうではないんです。

・パウロは、「自己推薦することなく」と書きます。自己推薦とは、自分の功績を前面に出し、自分を誇ることです。しかしその誇りを自分の手から離すことで、神さまはあなたを推薦してくださるのです。

(11月 7日)「コリントの信徒への手紙二 5:16~21」

それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。

(コリントの信徒への手紙二 5章 16節)

・「肉に従う」というのは、自分の思いや力、能力によって生きていくということです。わたしたちもすべてがうまくいっているときには、そのようなことが可能だと思っていたかもしれません。

・しかし「古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」とあるとおり、イエス様が十字架で血を流されたことによってこれまでの生き方とは違う、まったく新しい歩みが用意されているのです。自分に頼る必要はないのです。

・それが、神さまとの「和解」です。「神と和解させていただきなさい」とパウロが書くように、神さまがわたしたちに対して伸ばされて手を受け止め、イエス様を心に受け入れることが大切なのです。

(11月 8日)「コリントの信徒への手紙二 6:1~10」

なぜなら、「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた」と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。

(コリントの信徒への手紙二 6章 2節)

・「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」とパウロは書きます。この「時」とは、神さまのみ旨に適った時という意味です。「何事にも時があり天の下の出来事にはすべて定められた時がある」というコヘレトの言葉 3章 1節が思い出されます。

・パウロやその同労者たちは、人々から誤解されることが多くあったようです。辱めを受けることも、悪評を浴びることもあったようですが、そのときも「左右の手に義の武器を持ち、神さまに仕えていきました。

・その結果、「悲しんでいるようで、常に喜び、貧しいようで、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています」とその恵みを喜びます。わたしたちも神さまのお恵みを、パウロのように感じる事ができればと思います。

(11月 9日)「コリントの信徒への手紙二 6: 11~13」

子供たちに語るようにわたしは言いますが、あなたがたも同じように心を広くしてください。  
(コリントの信徒への手紙二 6章 13節)

- ・パウロは愛をもって、コリントの信徒の人たちに語りかけてきました。しかし彼らは心を閉ざし、パウロの言葉を受け入れることができなかつたようです。「彼は使徒ではないのに」という批判的な声もあったのかもしれませんが。
- ・パウロは前に出したコリントの信徒への手紙一の中で、「こんなことを書くのは、あなたがたに恥をかかせるためではなく、愛する自分の子供として諭すためなのです(一コリ 4: 14)」とも書いていました。
- ・パウロの願いはコリントの人たちが神さまに愛されていることを知り、イエス様の十字架によって神さまの前に立つことが赦されたことに気付いて欲しいということです。そしてその思いは、わたしたちにも向けられているのではないのでしょうか。

(11月 10日)「コリントの信徒への手紙二 6: 14~18」

あなたがたは、信仰のない人々と一緒に不釣り合いな軀につながれてはなりません。正義と不法とにどんなかわりがありますか。光と闇とに何のつながりがありますか。

(コリントの信徒への手紙二 6章 14節)

- ・パウロといえば、ユダヤ人だけでなく異邦人にも神さまの救いは与えられていると説く、いわゆる普遍的な救いを強調している人物です。しかしこの箇所を見る限り、少し排他的な考え方が見られるようにも思います。
- ・「信仰のない人と一緒に…つながれてはなりません」と書いたり、当時ユダヤ人の間で悪霊を指すのに用いられていた言葉「ベリアル」とキリストを対比させてみたり、そのような対立の構図を作り上げているかのようです。
- ・さらに 16節の後半から 18節で、パウロは旧約聖書のレビ記・サムエル記・イザヤ書・エレミヤ書・エゼキエル書から引用して語ります。「汚れたものに触れるのをやめよ」という言葉は、パウロのこれまでの語りとは方向が違うようにも感じます。

(11月 19日)「コリントの信徒への手紙二 9: 10~15」

なぜなら、この奉仕の働きは、聖なる者たちの不足しているものを補うばかりでなく、神に対する多くの感謝を通してますます盛んになるからです。

(コリントの信徒への手紙二 9章 12節)

- ・気前の良い献げ物、そして種まきと刈り入れの話を読むと、イエス様がなさった「種を蒔く人のたとえ(マルコ 4: 1~9)」を思い出します。そのたとえの中で蒔かれた種は、いろいろな土地に落ちていきました。
- ・普通だったら「良い土地」を目指してそこだけに蒔けばよいのに、ここで種まく人(神さまのことを指しています)は、様々な土地に種をバラまいていきます。そして収穫を喜ぶのです。
- ・わたしたちの献げ物も、報酬目当てであってはいけないのです。神さまが気前よく福音をバラまかれたように、わたしたちも神さまからいただいた恵みを、周りの人たちと分かち合っていきましょう。

(11月 20日)「コリントの信徒への手紙二 10: 1~6」

わたしたちは肉において歩んでいますが、肉に従って戦うではありません。

(コリントの信徒への手紙二 10章 3節)

- ・パウロは自分のことを、「あなたがたの間で面と向かっては弱腰だが、離れていると強硬な態度に出る、と思われている」と書きます。真偽はともかく、パウロは自分は直接厳しく言えないから、このように手紙を書いているのだということでしょうか。
- ・近年、メールやフェイスブック、ネットのコメント欄など、読んでいてつらくなることがあります。匿名であろうがなかろうが、剣のような文字で人を傷つけていることに気づかない人も多くいるようです。
- ・しかしわたしたちは、肉(自分の思い)に従うのではなく、イエス様の優しさに倣って生きていきたいものです。わたしたちはどんなときも、神さまの愛を伝える者でありたいと思います。

(11月17日)「コリントの信徒への手紙二 9:1~5」

わたしはあなたがたの熱意を知っているので、アカイア州では去年から準備ができていって、マケドニア州の人々にあなたがたのことを誇りました。あなたがたの熱意は多くの人々を奮い立たせたのです。

(コリントの信徒への手紙二 9章2節)

- ・パウロは前の章で、献金に対する動機を語りました。それはイエス様がご自分を貧しくされてわたしたちを豊かにされた、その業に倣うということです。そしてここでは、献金する人の「熱意」について語ります。
- ・パウロはコリントの人たちの自発性を信頼し、彼らがパウロの言ったとおりに準備してくれることを期待していました。しかしその熱意がいつの間にか薄れ、「用意できなかった」とならないように釘をさしているようにも見えます。
- ・このように書くと、何だかパウロは献金を競って出させるように画策しているようにも感じます。しかし「惜しまず差し出す」ためには、このような激励の仕方も必要なのでしょうか。ちょっと違和感を覚えますが。

(11月18日)「コリントの信徒への手紙二 9:6~9」

各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです。

(コリントの信徒への手紙二 9章7節)

- ・「惜しんでわずかしか種を蒔かない者は、刈り入れもわずかで、惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです」。この言葉は、当時人々の間で良く知られていた格言でした。当たり前のことを言っているように感じます。
- ・パウロはこの格言を、献金を集める際に用いました。しかし一方でわたしたちは、レプトン銅貨2枚を献金する貧しいやもめを称賛されたイエス様(ルカ 21:1~4)の物語を知っています。
- ・大切なのは決められたからするというのではなく、喜んでするということです。これは献金に限った話ではありません。教会の奉仕も当たったから仕方なくやるのではなく、進んでできればいいですね。

(11月11日)「コリントの信徒への手紙二 7:1~7」

あなたがたを、責めるつもりで、こう言っているのではありません。前にも言ったように、あなたがたはわたしたちの心の中にいて、わたしたちと生死を共にしているのです。(コリントの信徒への手紙二 7章3節)

- ・今日の箇所には、慰めという言葉が三回、喜ぶという言葉が二回出てきます。パウロはこの手紙の中で、自らが受けた苦難について多く語ってきました。しかしその中で感じたのは、慰めや喜びでした。
- ・「わたしたちはだれにも不義を行わず…」とわざわざ書いているということは、パウロやその弟子たちが不義を行い、破壊し、だまし取っているというわさが立っていたのでしょうか。
- ・しかしパウロはその中でも、喜びを感じていたのです。その困難の中に、神さまの愛を感じ取っていたのかもしれませんが。そしてパウロは、「あなたがたはわたしたちの心の中にいる」と書きます。コリントの人たちも、神さまの愛のうちにいると伝えるのです。

(11月12日)「コリントの信徒への手紙二 7:8~12」

今は喜んでいますが、あなたがたがただ悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めたからです。あなたがたが悲しんだのは神の御心に適ったことなので、わたしたちからは何の害も受けずに済みました。

(コリントの信徒への手紙二 7章9節)

- ・今日の箇所の冒頭にある「あの手紙」とはコリントの第一の手紙ではなく、別のものだと考えられています。残念ながらその手紙は残されていません。パウロは涙ながらにその手紙を書いたようです。
- ・パウロの手紙はときに厳しく、読み手を委縮させてしまいます。しかしその背後には、パウロの大きな愛がありました。そしてコリントの人たちが悔い改めたということを知って、パウロは喜びにあふれたことでしょう。
- ・11節には「例の事件」という、当人同士にしか理解できない言葉が書かれます。このことからパウロは常にコリントの人たちを思い、その歩みのために祈り続けていたことがわかります。教会の中でもそのような関係性が求められているのです。

(11月13日)「コリントの信徒への手紙二 7:13~16」

テトスは、あなたがた一同が従順で、どんなに恐れおののいて歓迎してくれたかを思い起こして、ますますあなたがたに心を寄せています。

(コリントの信徒への手紙二 7章 15節)

・テトスはパウロの協力者として、コリントの教会に派遣されていました。彼は割礼を受けていないことから、その両親はユダヤ人ではなかったと思われる。また彼自身もギリシア人でした。

・初期のキリスト教は、ユダヤ教の分派だと思われていました。パウロもユダヤ人ファリサイ派として歩んでいましたし、イエス様の最初の 12 弟子もすべてユダヤ人でした。いわゆる「民族宗教」の流れを汲んでいたのです。

・しかしその中でテトスのような異邦人がイエス様の福音を伝え、それを教会が受け入れていることに、テトスもパウロも喜びを感じていたのです。そのテトスやパウロの喜びが、キリスト教が世界に広がっていく原動力になったことでしょう。

(11月14日)「コリントの信徒への手紙二 8:1~7」

彼らは苦しみによる激しい試練を受けていたのに、その満ち満ちた喜びと極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなったということです。

(コリントの信徒への手紙二 8章 2節)

・ここからパウロは、現実的な問題について語っていきます。その問題とは、エルサレム教会が困窮していることです。パウロはそのためにコリントの人たちから献金を集め、エルサレム教会に届けていきます。

・このことは単に「施し」というだけではなく、ユダヤ人教会(エルサレム)と異邦人教会(コリント)とが一つの民となることも意味していました。相手の貧しさや痛みを共に担い、お互いに恵み豊かになっていくのです。

・わたしたちも献金をすることがあります。ただそれが、単なる慈善活動や施し、「～してあげた」ということになってしまったとしたら、どんな意味があるのでしょうか。共に歩いていくことが大切なのです。

(11月15日)「コリントの信徒への手紙二 8:8~15」

あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです。

(コリントの信徒への手紙二 8章 9節)

・献金について、このように言われたことがあります。「献金は金持ちだけがすればいいことであって、わたしたちのような者からは集めるべきではない」。正直、とても悲しい気持ちになりました。

・パウロは、イエス様はわたしたちのために自分を貧しくされて、その結果わたしたちを豊かにされたのだと述べます。一番みじめな十字架の死を選び、そのことによってわたしたちに命を与えられたのです。

・そのイエス様がされたことにわたしたちも参与しようという一つの業が、献金です。イエス様がわたしたちに恵みをくださったように、わたしたちもまた、「進んで」おこなうことが大切なのです。

(11月16日)「コリントの信徒への手紙二 8:16~24」

わたしたちは、主の前だけではなく、人の前でも公明正大にふるまうように心がけています。

(コリントの信徒への手紙二 8章 21節)

・今も駅前などで、「街頭募金」がおこなわれていることがあります。また大きな災害がおこったあとにはコンビニなどにも募金箱が置かれ、テレビのニュースの中でも振込先が紹介されることがあります。

・ただこの「募金」という行為は、誤解を受けやすいのも事実です。誰にも非難されないように、また公明正大にふるまうように心がけることはとても難しいことですが、協力者を得ることによってパウロは批判を少なくしようとしていたようです。

・「宗教法人の会計」も、人々の目から誤解を受けやすいものです。「法人税が免除されている」ことだけがフォーカスされ、疑問の目を向けられることもしばしばです。だからこそわたしたちもまた、神と人の前に公明正大にふるまうことを求められているのです。